

栃木方言「～ヨウダ」の待遇表現

—相手の属性による敬語の使い分け—

松田 勇一・高丸 圭一

要 旨

栃木方言では、「～ナケレバナラナイ」等の意味内容を表す際に、「～ヨウダ」が用いられることがある。例えば、聞き手に対して「今日、私たちは残業しなければなりませんね」という内容を伝える場合、「今日は残業するようですね」と表現する。また、栃木方言は、一般的に敬語がなく荒々しいといったイメージが存在する。しかしながら、それは方言の使用場面においてのものであり、標準語を使用しているという意識の下では聞き手の属性によって表現を使い分けられていると考えられる。

本研究では、栃木方言「～ヨウダ」の待遇表現が、聞き手の属性によってどのように使い分けられているのかを調査するために、栃木県在住者に対して質問紙調査を実施した。その結果、聞き手（「年下」、「同年」、「年上」、「初対面」）によって、「～テイタダクヨウデスネ」、「～モラウヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」、「～ヨウダネ」、「オ～スルヨウデスネ」等の待遇表現が使い分けられていることが明らかになった。

【キーワード】 栃木方言、「～ヨウダ」、当為表現、待遇表現、敬語

1. はじめに

栃木県の方言（以下、栃木方言）では、「～ナケレバナラナイ」、「～ナキャナラナイ」等の意味内容を表す際に、「～ヨウダ」が多く用いられる。例えば、聞き手に対して「私たちは今日中にこの仕事をやらなければなりませんね」という内容を伝える場合、「今日中にこの仕事をやるようですね」と表現する。標準語⁽¹⁾の助動詞「ヨウダ」⁽²⁾には、様々な意味用法が存在する（グループ・ジャマシイ, 1998、山口他, 2001を参照）が、ある目的を達成するために必要とされる行為を相手に促す当為表現（小池他, 2002）として用いられることはない。また、益岡他（1992）、小池他（2002）によると、当為表現には「～ネバラナヌ」、「～ネバナラナイ」、「～ナケレバナラヌ」、「～ナケレバナラナイ」、「～ナケレバイケナイ」、「～ナケレバ駄目ダ」、「～ナクテハイケナイ」、「～ナクテハ駄目ダ」、「～ベキダ」等があるが、「～ヨウダ」は取り挙げられていない。本研究では、このような当為表現と同じ意味内容を持つ「～ヨウダ」を

栃木方言における当為表現「～ヨウダ」と呼ぶ。

栃木方言に関する研究、書籍には様々なものがある(大橋, 1963; 森下, 1999; 2003; 嶋, 2003; 平山, 2004; 高丸・松田, 2006; 2007a; 2007b; 松田・高丸, 2006; 2008; 2009; まいぶれ那須, 2006)が、その多くは語彙、アクセント、イントネーションに関するものであり、敬語や文法等の記述は少ない。

「～ヨウダ」の研究については、松田・高丸(2008; 2009)がある。松田・高丸(2008)では、標準語と栃木方言の「～ヨウダ」の意味内容と用法を整理し、調査によって栃木県在住者が実際に当為表現として「～ヨウダ」を使用することを明らかにしている。松田・高丸(2009)では、栃木県在住者に対して当為表現の使い分けについての質問紙調査を実施した。その結果、5つの当為表現(「～ナキャナラナイ」、「～ナキャイケナイ」、「～ナキャ駄目」、「～ベキダ」、「～ヨウダ」)の中で最も使用率が高いものは「～ヨウダ」であること、「～ヨウダ」は聞き手の属性が変わっても使用されることが多いこと、当為表現に先行する動詞によって当為表現の使用率に変化はないこと等を明らかにした。また、「～ヨウダ」は、聞き手に対して、当為表現を婉曲的に伝える「当為表現の緩衝機能」を持つことを指摘している。しかしながら、「～ヨウダ」の形態、聞き手の属性による待遇表現の変化等は明らかにされていない。そこで、本研究では、栃木方言話者に対して質問紙調査を実施し、話し手と聞き手の関係の違いによって当為表現「～ヨウダ」の待遇表現はどのように異なるのかを明らかにする。

2. 栃木方言の敬語

栃木方言は、一般的に荒々しい言葉と言われている。森下(1999; 2003)、平山(2004)は、その原因⁽³⁾として栃木方言には敬語がないからとしている。また、森下(2003)は、栃木県では年上の人に対しても、目上の人に対しても「です」「ます」以外の敬語を使うことはまれであり、栃木県出身者は謙譲語をうまく使うことができないと述べている⁽⁴⁾。しかしながら、栃木方言には全く敬語が無いのではなく、いくつかの特徴的な敬語が存在している。森下(1999; 2003)、平山(2004)は、栃木方言の敬語として、以下の言語形式を取り上げている。

(1) 「ガンス」: 形容詞の連用形に接続し、丁寧の意を表す。

例: オハヨガンス(おはようございます) / アリガトガンス(ありがとうございます)
/ ヨガンス(良いです)

(2) 「ヤンス」: 動詞・形容動詞の連用形に接続し、尊敬、丁寧の意を表す。

例：シッテヤンスカ（知っていますか）／オボエテヤンスカ（覚えていますか）／ソウデヤンス（そうです）／シズカデヤンシタ（静かでした）

(3) 「セ」：動詞の未然形に接続し、「～してください」という意を丁寧に表現する。

例：ミラッセ/ミヤッセ（見てください）／キラッセ/キヤッセ（来てください）／アルカッセ（歩いてください）／ノマッセ（飲んでください）

(4) 「ナンショ」：動詞の連用形に接続し、「～してください」という意を丁寧に表現する。

「セ」よりも丁寧の度合いが強い。

例：アオガリナンショ（お上がりください）／オトリナンショ（お取りください）／オアガンナンショ（召し上がってください）／オヨシナンショ（おやめください）

(5) 「ナイ」「サイ」「セー」：文末に付き、「です」「ですね」の意を表す。

例：ソーダナイ（そうですね）／ソーサイ（そうです）／ソーセー（そうです）

以上の項目は、栃木方言の特徴的な敬語形式であるが、これらの使用者の多くは老年層であり、中年層、若年層では使用が少ないのが現状と考えられる。また、森下（1999；2003）、平山（2004）では、上記の敬語形式以外に、栃木方言における特徴的な文法項目⁽⁵⁾として、「ベー／ペー」、「タッタ／タッケ」、「ツチャッタ／ツチッタ」等を取り上げているが、「～ヨウダ」についての記述はない。

3. 調査方法

3.1 「～ヨウダ」の待遇表現

松田・高丸（2008；2009）では、栃木県在住者が実際に当為表現として「～ヨウダ」を使用すること、聞き手の属性が変化しても使用されることが多いこと等を明らかにしたが、「～ヨウダ」の待遇表現については触れていない。森下（2003）では、栃木県では「です」「ます」以外の敬語を使うことが殆どないとしているが、それは「栃木方言を話している」という状況においてのものであり、話者自身が「標準語を使用している」という意識の下では敬語の使用は多くあると考えられる。さらに「～ヨウダ」は、栃木方言として意識されておらず、使用者の多くは当為表現「～ヨウダ」を標準語として認識している可能性が高い⁽⁶⁾。したがって、「～ヨウダ」は、標準語の一形態として使用され、話し手と聞き手の関係の違いによって待遇レベルが変化すると考えられる。そこで本研究では、「～ヨウダ」について待遇レベルが異なる幾つかの形式を設置した。

また、当為表現「～ヨウダ」が持つ言語機能は、発話内容で示された行為が誰によって行

われるのかによって3つに分類することができる。(1)当該行為を聞き手が行う場合、(2)当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合、(3)当該行為を話し手が行う場合である。まず、(1)は、話し手が聞き手に対して「あなたは～しなければなりません」という命令、依頼の意味内容を示す場合である。(2)は、話し手が聞き手に対して「あなたと私は～しなければなりません」という共同動作を明示する場合である。(3)は、話し手が聞き手に対して「私は～しなければなりません」という話し手自身の義務を聞き手に確認する場合である。相手の行為について言う場合は尊敬語、自分の行為について言う場合は謙譲語、聞き手への敬意は丁寧語を使用するため、各場合で使用する敬語は、(1)は尊敬語と丁寧語、(2)は丁寧語、(3)は謙譲語と丁寧語となる。

(1) 当該行為を聞き手が行う場合

- ①～テイタダクヨウデスネ (授受動詞の尊敬語＋ヨウ＋丁寧語)
- ②～テモラウヨウデスネ (授受動詞＋ヨウ＋丁寧語)
- ③～ヨウデスネ (ヨウ＋丁寧語)
- ④～ヨウダネ (ヨウ)

(2) 当為表現を話し手と聞き手が共に行う場合

- ①～ヨウデスネ (ヨウ＋丁寧語)
- ②～ヨウダネ (ヨウ)

(3) 当該行為を話し手が行う場合

- ①オ～スルヨウデスネ (謙譲語＋ヨウ＋丁寧語)
- ②～ヨウデスネ (ヨウ＋丁寧語)
- ③～ヨウダネ (ヨウ)

(1)は、聞き手が動作を行うことから「～テモラウ」を基準とし、最も待遇度の高い形式として「動詞＋テイタダク＋ヨウ＋丁寧語」を設置した。(2)は、話し手と聞き手が共に動作を行う為、尊敬語、謙譲語の使用はできない。したがって、敬体「デス」と常体「ダ」の対立である。(3)は、話し手自身が動作を行うことから、最も待遇度の高い形式には謙譲語を含めた。

3.2 質問紙

栃木県在住者が、当為表現「～ヨウダ」を含む待遇表現をどのように使用しているのかを観察するために、質問紙調査を行った。調査票は、フェイスシートと「～ヨウダ」の待遇表現に関する質問からなっている。フェイスシートには、被験者の性別、年齢、居住歴等の記

入欄、回答方法を示した。「～ヨウダ」の待遇表現に関する質問部分は、話者A（被験者自身）と話者Bの会話場面を示し、Aの最後の部分（当為表現を使うべき箇所）に待遇レベルの異なる表現が示されている。回答者には、提示された表現の中で、普段使用している表現を1つ選んでもらった。なお、会話文の中で話し手Aの文末は、調査者側で待遇表現を固定しないよう「です」、「ます」等は省略し示した。具体的には以下のような形式である（以下に示す例は、当該行為の主体は聞き手／聞き手の属性は親しい年上／「～ヨウダ」に先行する動詞は「やる」の場合である）。

○Aはあなた、Bは近所の親しい年上の人です。あなたは、Bさんにチェックを頼まれた書類を返しました。

A：Bさん、この書類、数字が違うような気が…。

B：あっ、本当だ！ やり直しなあ…。

A：もう一度、

- | | |
|---|----------------|
| { | 1 やっていただくようですね |
| | 2 やってもらおうようですね |
| | 3 やるようですね |
| | 4 やるようだね |
| | 5 その他→ _____ |

上で示したような会話場面は、発話内容で表された行為を誰が行うのか（3種類）、話者Aと話者Bの関係（4種類）、「～ヨウダ」が接続する動詞が異なる会話文（4種類）からなっている。

発話内容の行為主については、3.1で示した通り、当為表現で表される動作を誰が行うかによって、(1)当該行為を聞き手Bが行う、(2)当該行為を話し手Aと聞き手Bが共に行う、(3)当該行為を話し手Aが行う場面に分けられる。したがって、具体的な場面設定は、(1)AがBの作っている書類のチェックを頼まれそれをBに返した場面、(2)AとBと一緒に書類を作っている場面、(3)AがBに頼まれた書類を作っている場面である。

話者Aと話者Bの関係は、話者Aは被験者自身であり、Bは親しい年上、親しい同年、親しい年下、初対面の同年位の人という4つの設定を設けた。これは、会話の相手との年齢差、親疎により差が見られるかどうかを確認するためである。

「～ヨウダ」が接続する動詞が異なる会話文（4種類）というのは、使われる動詞によっ

て待遇表現に違いが見られるかどうか、あるいは動詞によって言い易さのようなものがあるのかを観察するためである。発話内容を聞き手が行う場合と話し手と聞き手が共に行う場合は「やる」「書く」「来る」「出す」、発話内容を話し手が行う場合は「直す」「書く」「来る」「出す」を「～ヨウダ」が接続する動詞として選定した⁽⁷⁾。

3.3 調査対象

調査は2007年10月から12月にかけて、栃木県在住の91名（男性58名、女性32名、不明1名）を対象に行った。91名の年代の内訳は以下の通りである。なお、今回の調査は、栃木方言話者のみを対象としたものではなく、現在、栃木県内に在住している者を対象とした。したがって、被調査者の中には、栃木方言を解さない者も存在すると考えられる。

表1 調査対象者の内訳

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
1	18	9	13	22	20	8	91

4. 結果と考察

4.1 当該行為を聞き手が行う場合

表2は、当該行為を聞き手が行う場合において、「～ヨウダ」の待遇表現ごとに集計した結果である。表2によると、全体としては「～ヨウダネ」が最も多いが、聞き手の属性によって内容は大きく異なっている。したがって、以下、年齢ごと、親疎ごとに分析する。

表2 当該行為を聞き手が行う場合の結果（年齢親疎別）

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下	初対面同年	全体
～テイタダクヨウデスネ	77(21.9)	7 (1.9)	12 (3.3)	152(41.9)	248(17.3)
～テモラウヨウデスネ	100(28.4)	60(16.7)	39(10.9)	93(25.6)	292(20.4)
～ヨウデスネ	108(30.7)	52(14.4)	36(10.0)	83(22.9)	279(19.5)
～ヨウダネ	22 (6.3)	195(54.2)	211(58.8)	0 (0.0)	428(29.8)
その他	45(12.8)	46(12.8)	61(17.0)	35 (9.6)	187(13.0)
合計	352(100.0)	360(100.0)	359(100.0)	363(100.0)	1434(100.0)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

4.1.1 話者間の年齢差による違い

ここでは、年齢による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい年上の場合、親しい同年の場合、親しい年下の場合を取り上げる。表2中、初対面同年を除いたデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(8)=327.31, p<.01$)。そこで、残差分析を行った(表3)。

表2によると、年上、同年、年下によって待遇表現の使い分けがなされていることが分かる。年上では、「～ヨウデスネ」が最も多く、次いで「～テモラウヨウデスネ」、「～テイタダクヨウデスネ」となっており、待遇レベルがより高い授受動詞を含む表現を高い割合で用いていることが分かる。同年、年下では「～ヨウダネ」が最も多く、常体での自然な会話がなされていることが分かる。表3を見ると、聞き手の年齢ごとによる待遇表現の使用差が明白である。年上では、同年、年下に比して「～テイタダクヨウデスネ」、「～モラウヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が有意に多く、「～ヨウダネ」の使用が有意に少ないことが分かる。一方、同年、年下では、年上に比して「～テイタダクヨウデスネ」、「～モラウヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が少なく、「～ヨウダネ」の使用が有意に多いことが分かる。

表3 表2の調整された残差(年上×同年×年下)

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下
～テイタダクヨウデスネ	10.35**	-5.72**	-4.57**
～テモラウヨウデスネ	5.79**	-1.15	-4.61**
～ヨウデスネ	7.33**	-2.32*	-4.97**
～ヨウダネ	-15.76**	6.75**	8.92**
その他	-0.92	-0.94	1.86*

(* $p<.05$ ** $p<.01$)

また、表2を見ると、聞き手が親しい同年の場合と親しい年下の場合では大きな違いが見られないことから、両者の違いを検証するために χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=11.41, p<.05$)。そこで、残差分析を行った(表4)。その結果、聞き手が親しい同年の場合は、聞き手が親しい年下の場合に比べて、「～テモラウヨウデスネ」と「～ヨウデスネ」が有意に多いことが明らかになった。

以上の結果から、当該行為を聞き手が行う場合においては、聞き手の年齢による「～ヨウダ」

の待遇表現の使い分けが存在しており、且つその敬意のレベルは年上、同年、年下の順に高いということが言える。

表4 表2の調整された残差 (同年×年下)

待遇表現	親しい同年	親しい年下
～テイタダクヨウデスネ	-1.17	1.17
～テモラウヨウデスネ	2.26*	-2.26*
～ヨウデスネ	1.81 †	-1.81 †
～ヨウダネ	-1.25	1.25
その他	-1.59	1.59

(† p<.10 *p<.05 **p<.01)

4.1.2 話者間の親疎による違い

ここでは、親疎による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい同年の場合、初対面の同年位の場合を取り上げる。表2中、聞き手が親しい同年の場合、初対面同年位の場合のデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=342.96$, $p<.01$)。そこで、残差分析を行った (表5)。

表5 表2の調整された残差 (親しい同年×初対面同年)

待遇表現	親しい同年	初対面の同年
～テイタダクヨウデスネ	-12.96**	12.96**
～テモラウヨウデスネ	-2.95**	2.95**
～ヨウデスネ	-2.91**	2.91**
～ヨウダネ	16.41**	-16.41**
その他	1.34	-1.34

(**p<.01)

表2を見ても明らかなように、初対面同年では、「～ヨウダネ」の使用が全く見られなかった。そのため、残差分析においても、親しい同年に比して初対面同年の「～ヨウダネ」の使用は有意に少ないという結果となった。また、初対面の同年では、「～テイタダクヨウデスネ」の使用

が最も多くなった。この結果から、当該行為を聞き手が行う場合においては、聞き手が初対面の場合には敬意の高い表現を用い、常体は使用しないということが言える。

さらに、表2において、「～テイタダクヨウデスネ」の使用を見ると、初対面の同年は親しい年上よりも使用率が高くなっている。そこで、表2の初対面の同年は親しい年上を取り上げ、両者の違いを検証するために χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=51.18, p<.05$)。そこで、残差分析を行った(表6)。その結果、聞き手が初対面同年の場合は、聞き手が親しい年上の場合に比べて、「～イタダクヨウデスネ」の使用が有意に多いことが明らかになった。

以上の結果は、聞き手が初対面である場合は、話し手の意識として「標準語を話さなければいけない」、「丁寧に話さなければならない」等の意識が働いたためと考えられる。また、敬語を使うべき年上であっても、親しい間柄では「標準語で話さなければならない」という意識はないはずである。また、最低限の敬語である「です」「ます」を使用していれば、相手に対して敬意を払わないということにはならない。そのため、初対面同年には標準語の敬語らしい「～テイタダク」をより多く用いることになったと考えられる。

表6 表2の調整された残差(年上×初対面同年)

待遇表現	親しい年上	初対面同年
～テイタダクヨウデスネ	-5.73**	5.73**
～テモラウヨウデスネ	0.84	-0.84
～ヨウデスネ	2.36*	-2.36*
～ヨウダネ	4.84**	-4.84**
その他	1.33	-1.33

(* $p<.05$ ** $p<.01$)

4.1.3 動詞による違い

ここでは、「～ヨウダ」が接続する動詞によって、待遇表現に違いがあるのかを見る。当該行為を聞き手が行う場合においては、「～ヨウダ」に先行する動詞は「やる」「書く」「来る」「出す」である。表7は、動詞ごとに分類集計した結果である。表7を基に、 χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(12)=4.52, n.s.$)。したがって、当該行為を聞き手が行う場合においては、「～ヨウダ」の待遇表現は、先行する動詞には関係なく使用されることができると言える。

表7 当該行為を聞き手が行う場合の結果 (動詞別)

待遇表現	やる	書く	来る	出す	全体
～テイタダクヨウデスネ	55(15.3)	65(18.1)	65(18.2)	63(17.6)	248(17.3)
～テモラウヨウデスネ	79(22.0)	66(18.4)	72(20.1)	75(20.9)	292(20.4)
～ヨウデスネ	72(20.1)	74(20.6)	65(18.2)	68(19.0)	279(19.5)
～ヨウダネ	110(30.6)	109(30.4)	103(28.8)	106(29.6)	428(29.8)
その他	43(12.0)	45(12.5)	53(14.8)	46(12.8)	187(13.0)
合計	359(100.0)	359(100.0)	358(100.0)	358(100.0)	1434(100.0)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

4.2 当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合

表8は、当該行為を聞き手と話し手が行う場合において、「～ヨウダ」の待遇表現ごとに集計した結果である。表8によると、全体としては「～ヨウデスネ」と「～ヨウダネ」がほぼ同じ割合を占めているが、聞き手の属性によって内容は大きく異なっている。したがって、以下、年齢ごと、親疎ごとに分析する。

表8 当該行為を話し手と聞き手が行う場合の結果 (年齢親疎別)

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下	初対面同年	全体
～ヨウデスネ	280(79.5)	37(10.3)	20(5.6)	271(74.5)	608(42.5)
～ヨウダネ	28(8.0)	266(73.9)	276(77.5)	52(14.3)	622(43.4)
その他	44(12.5)	57(15.8)	60(16.9)	41(11.3)	202(14.1)
合計	352(100.0)	360(100.0)	356(100.0)	364(100.0)	1432(100.0)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

4.2.1 話者間の年齢による違い

ここでは、年齢による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい年上の場合、親しい同年の場合、親しい年下の場合を取り上げる。表8中、初対面同年を除いたデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=590.26, p<.01$)。そこで、残差分析を行った (表9)。

表8によると、年上と同年・年下が大きく異なることがわかる。年上では、「～ヨウデスネ」が多く8割近くとなった。一方、同年・年下では「～ヨウダネ」が多く共に7割を超えている。表9を見ると、聞き手の年齢による待遇表現の使用差が明白である。年上では、同年、年下に比して「～ヨウデスネ」の使用が有意に多く、「～ヨウダネ」の使用が有意に少ないことが分かる。一方、同年、年下では、年上に比して「～ヨウデスネ」の使用が少なく、「～ヨウダネ」の使用が有意に多いことが分かる。

表9 表8の調整された残差（年上×同年×年下）

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下
～ヨウデスネ	23.66**	-10.67**	-12.90**
～ヨウダネ	-20.86**	9.58**	11.19**
その他	-1.65	0.49	1.15

(*p<.05 **p<.01)

また、聞き手が親しい同年場合と親しい年下場合では大きな違いが見られないことから、両者の違いを検証するために χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りには有意傾向が認められた($\chi^2(2)=5.31, p<.10$)。そこで、残差分析を行った(表10)。その結果、聞き手が親しい同年の場合は、聞き手が親しい年下の場合に比べて「～ヨウデスネ」が有意に多いことが明らかになった。

以上の結果から、当該行為を聞き手と話し手が行う場合においては、聞き手の年齢による「～ヨウダ」の待遇表現の使い分けが存在しており、且つその敬意のレベルは年上、同年、年下の順に高いということが言える。

表10 表8の調整された残差（同年×年下）

待遇表現	親しい同年	親しい年下
～ヨウデスネ	2.30*	-2.30*
～ヨウダネ	-1.14	1.14
その他	-0.37	0.37

(*p<.05)

4.2.2 話者間の親疎による違い

ここでは、親疎による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい同年の場合、初対面の同年位の場合を取り上げる。表8中、聞き手が親しい同年の場合、初対面同年位の場合のデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(4)=324.39, p<.01$)。そこで、残差分析を行った (表11)。

表11 表8の調整された残差 (親しい同年×初対面同年)

待遇表現	親しい同年	初対面の同年
～ヨウデスネ	-17.46**	17.46**
～ヨウダネ	16.16**	-16.16**
その他	1.80 †	-1.80 †

(† $p<.10$ ** $p<.01$)

表8を見ても明らかなように、初対面同年では、「～ヨウダネ」の使用が少なかった。そのため、残差分析においても、親しい同年に比して初対面同年の「～ヨウダネ」の使用は有意に少ないという結果となった。しかしながら、4.1.2の当該行為を聞き手が行う場合においては、聞き手が初対面の場合には「～ヨウダネ」は全く観測されなかった。この結果と比較すると、同じ初対面の同年であっても、当該行為を聞き手と話し手が共に行う場合は、聞き手が単独で行う場合よりも「～ヨウダネ」の使用が多いということが言える。

さらに、表8において、「～ヨウデスネ」の使用を見ると、親しい年上と初対面の同年での使用率が高い。そこで、両者の違いを検証するために表8を基に χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=7.25, p<.05$)。そこで、残差分析を行った (表12)。その結果、聞き手が初対面同年の場合は、聞き手が親しい年上の場合に比べて、「～ヨウダネ」の使用が有意に多いことが明らかになった。この結果は、4.1.2の当該行為を聞き手が行う場合の結果とは逆となっている。4.1.2では、初対面同年に対しての方が、親しい年上よりも敬意が高かったのに対し、当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合では、親しい年上に対しての方が初対面同年よりも敬意が高いという結果となった。

以上の結果は、聞き手が初対面である場合は、話し手の意識として「丁寧に話さなければならない」という意識が働くが、発話内容で表される行為を話し手と聞き手が共に行う (発話者自身が行う) ため、聞き手のみが行う場合よりも敬意レベルが低い表現を用いるためと考えられる。

表12 表8の調整された残差（年上×初対面同年）

待遇表現	親しい年上	初対面同年
～ヨウデスネ	1.62	-1.62
～ヨウダネ	-2.69**	2.69**
その他	0.51	-0.51

(* $p < .05$ ** $p < .01$)

4.2.3 動詞による違い

ここでは、当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合において、「～ヨウダ」が接続する動詞によって、待遇表現に違いがあるのかを見る。当該行為を話し手と聞き手が行う場合においては、「～ヨウダ」に先行する動詞は「やる」「書く」「来る」「出す」である。表13は、動詞ごとに分類集計した結果である。表13を基に、 χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(6)=0.76, n.s.$)。したがって、当該行為を話し手と聞き手が行う場合においては、「～ヨウダ」の待遇表現は、先行する動詞には関係なく使用されることができる。

表13 当該行為を話し手と聞き手が行う場合の結果（動詞別）

待遇表現	やる	書く	来る	出す	全体
～ヨウデスネ	151(42.2)	153(42.7)	152(42.5)	152(42.5)	608(42.5)
～ヨウダネ	158(44.1)	158(44.1)	154(43.0)	152(42.5)	622(43.4)
その他	49(13.7)	47(13.1)	52(14.5)	54(15.1)	202(14.1)
合計	358(100.0)	358(100.0)	358(100.0)	358(100.0)	1432(100.0)

表中の数値は度数、括弧内は百分率。

4.3 当該行為を話し手が行う場合

表14は、当該行為を話し手が行う場合において、「～ヨウダ」の待遇表現ごとに集計した結果である。表14によると、全体としては「～ヨウデスネ」が最も多く、次いで「～ヨウダネ」となった。また、謙譲語である「オ～ヨウデスネ」は全体としては3.8%と少なかった。ただし、動詞「来る」の謙譲語は「伺う」を用い、「伺ウヨウデスネ」を用いた。以下、聞き手の属性ごとに分析する。

表14 当該行為を話し手が行う場合の結果 (年齢親疎別)

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下	初対面同年	全体
オ～ヨウデスネ*	28(7.9)	1(0.3)	1(0.3)	24(6.7)	54(3.8)
～ヨウデスネ	253(71.1)	69(19.0)	41(11.5)	248(68.9)	611(42.5)
～ヨウダネ	22(6.2)	231(63.5)	237(66.6)	32(8.9)	522(36.4)
その他	53(14.9)	63(17.3)	77(21.6)	56(15.6)	249(17.3)
合計	356(100.0)	364(100.0)	356(100.0)	360(100.0)	1436(100.0)

*「同ウヨウデスネ」を含む。表中の数値は度数、括弧内は百分率。

4.3.1 話者間の年齢による違い

ここでは、年齢による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい年上の場合、親しい同年の場合、親しい年下の場合を取り上げる。表14中、初対面同年を除いたデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった($\chi^2(6)=457.91, p<.01$)。そこで、残差分析を行った(表15)。

表14によると、年上と同年・年下では待遇表現が大きく異なることがわかる。年上では、「～ヨウデスネ」が多く7割近くとなった。一方、同年・年下では「～ヨウダネ」が多く共に6割を超えている。表15は残差分析の結果であるが、これを見ると年上では、同年、年下に比して「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が有意に多く、「～ヨウダネ」の使用が有意に少ないことが分かる。一方、同年、年下では、年上に比して「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が少なく、「～ヨウダネ」の使用が有意に多いことが分かる。

表15 表14の調整された残差 (年上×同年×年下)

待遇表現	親しい年上	親しい同年	親しい年下
オ～ヨウデスネ*	7.11**	-3.58**	-3.51**
～ヨウデスネ	18.21**	-7.33**	-10.84**
～ヨウダネ	-18.23**	8.44**	9.74**
その他	-1.83†	-0.38	2.22*

*「同ウヨウデスネ」を含む。(† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$)

また、聞き手が親しい同年場合と親しい年下場合の違いを検証するために χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りには有意傾向が認められた ($\chi^2(3)=8.52, p<.05$)。そこで、残差分析を行った(表16)。その結果、聞き手が親しい同年の場合は、聞き手が親しい年下の場合に比べて「～ヨウデスネ」が有意に多いことが明らかになった。

以上の結果から、当該行為を話し手が行う場合においては、聞き手の年齢による「～ヨウダ」の待遇表現の使い分けが存在しており、且つその敬意のレベルは年上、同年、年下の順に高いということが言える。

表16 表14の調整された残差 (同年×年下)

待遇表現	親しい同年	親しい年下
オ～ヨウデスネ*	-0.02	0.02
～ヨウデスネ	2.77**	-2.77**
～ヨウダネ	-0.88	0.88
その他	-1.46	1.46

*「何ウヨウデスネ」を含む。(** $p<.01$)

4.3.2 話者間の親疎による違い

ここでは、親疎による「～ヨウダ」の待遇表現の違いを見るために、聞き手が親しい同年の場合、初対面の同年位の場合を取り上げる。表14中、聞き手が親しい同年の場合、初対面同年位の場合のデータを基に χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意であった ($\chi^2(3)=273.21, p<.01$)。そこで、残差分析を行った(表17)。

表17 表14の調整された残差 (親しい同年×初対面同年)

待遇表現	親しい同年	初対面の同年
オ～ヨウデスネ*	-4.71**	4.71**
～ヨウデスネ	-13.54**	13.54**
～ヨウダネ	15.27**	-15.27**
その他	0.64	-0.64

*「何ウヨウデスネ」を含む。(† $p<.10$ ** $p<.01$)

表17を見ると、親しい同年と初対面同年では、敬語を使うか否かが明白に分かれていることが分かる。親しい同年では初対面の同年に比して「～ヨウダネ」の使用が多く、「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が少ない。一方、初対面同年では、「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」の使用が多く、「～ヨウダネ」の使用が少ない。また、4.1.2でも述べたが、当該行為を聞き手が行う場合においては、聞き手が初対面の場合は「～ヨウダネ」は全く観測されなかったが、4.2.2の当該行為を話し手と聞き手が行う場合、さらにここで見るように当該行為を話し手が行う場合には、「～ヨウダネ」の使用が観測された。したがって、聞き手が初対面の場合であっても、当該行為を話し手も行う時には「～ヨウダネ」を用いるということができる。初対面の相手に対して常体で話すということは、その他の結果からも考えにくい。これは、聞き手に対する発話というよりも、むしろ独り言、つまり自分自身に対する発話であると考えられよう。

さらに、表14において、「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」が多く観測された親しい年上と初対面の同年のの違いを検証するために表14を基に χ^2 検定を行った。その結果、度数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(3)=2.27, n.s.$)。したがって、当該行為を話し手が行う場合、聞き手が親しい年上の時と初対面の同年の時には、「～ヨウダ」の待遇表現の違いは存在しないと言える。

4.3.3 動詞による違い

ここでは、当該行為を話し手が行う場合において、「～ヨウダ」が接続する動詞が異なると待遇表現に違いが見られるのか、つまり動詞によって「～ヨウダ」の言い易さのようなものがあるのかを検証する。当該行為を話し手と聞き手が行う場合においては、「～ヨウダ」に先行する動詞は「直す」「書く」「来る」「出す」である。

表18は、動詞ごとに分類集計した結果である。表18を基に、 χ^2 検定を行った結果、度数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(9)=2.50, n.s.$)。したがって、当該行為を話し手が行う場合においては、「～ヨウダ」の待遇表現は、先行する動詞には関係なく使用されることができる。

表18 当該行為を話し手が行う場合の結果（動詞別）

待遇表現	直す	書く	来る	出す	全体
オ～ヨウデスネ	14(3.9)	11(3.1)	16(4.5)*	13(3.6)	54(3.8)
～ヨウデスネ	150(41.8)	151(42.1)	149(41.5)	161(44.8)	611(42.5)
～ヨウダネ	131(36.5)	133(37.0)	129(35.9)	129(35.9)	522(36.4)
その他	64(17.8)	64(17.8)	65(18.1)	56(15.6)	249(17.3)
合計	359(100.0)	359(100.0)	359(100.0)	359(100.0)	1436(100.0)

*「同ウヨウデスネ」。表中の数値は度数、括弧内は百分率。

5. まとめと今後の課題

本研究は、栃木方言「～ヨウダ」が聞き手の属性によってどのような待遇表現として使用されるのかを考察したものである。栃木県在住者を対象に質問紙調査を行い、その結果、以下の点が明らかになった。

(1) 当該行為を聞き手が行う場合

- ① 「～ヨウダ」の待遇表現（敬意が高い順に「～イタダクヨウデスネ」、「～モラウヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」、「～ヨウダネ」）は、聞き手の属性によって変化する。
- ② 「～ヨウダ」の待遇表現は、聞き手が「親しい年下」<「親しい同年」<「親しい年上」<「初対面の同年」の順に敬意が高い。

(2) 当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合

- ① 「～ヨウダ」の待遇表現（敬意が高い順に「～ヨウデスネ」、「～ヨウダネ」）は、聞き手の属性によって変化する。
- ② 「～ヨウダ」の待遇表現は、聞き手が「親しい年下」<「親しい同年」<「初対面の同年」<「親しい年上」の順に敬意が高い。

(3) 当該行為を話し手が行う場合

- ① 「～ヨウダ」の待遇表現（敬意が高い順に「オ～ヨウデスネ」、「～ヨウデスネ」、「～ヨウダネ」）は、聞き手の属性によって変化する。
- ② 「～ヨウダ」の待遇表現は、聞き手が「親しい年下」<「親しい同年」<「親しい年上」・「初対面の同年」の順に敬意が高い。

(4) 「～ヨウダ」の待遇表現は、「～ヨウダ」が接続する動詞によって変化することはない。

(5) 当該行為を話し手と聞き手が共に行う場合と話し手が行う場合は、待遇表現として「～

「ヨウダネ」が使用されることがあるが、その際の話し手の意識としては聞き手に対する発話というよりも自分自身に向けての発話である可能性がある。

本稿では、紙面の都合上、「～ヨウダ」の待遇表現の多様性、調査において「その他」として分類されたものについての分析などができなかった。今後は、それらに加え、被験者の年代、性別等も考慮し、研究を精練させていきたい。

注

- (1) 小池他 (2002) は、「標準語」、「共通語」とは「東京語を基盤とした、広く全国に通じる規範的な言語でありながら、それを耳にしても話し手がどの地方の出身かわからないようなことばである」としている。また、「標準語」と「共通語」の違いとして、規範性がより厳格なものが「標準語」であり、よりゆるいものが「共通語」であるとしている。本稿では、この定義を踏襲する。
- (2) 「ヨウダ」は、名詞「ヨウ」と助動詞「ダ」とするものもあるが、本研究では山口他 (2001) に倣い「ヨウダ」は一語の助動詞として考える。
- (3) 森下 (1999) は、栃木方言が荒いといわれる原因には、敬語がないということの他に、語気を強めて言う接頭辞「オッ」、「カッ」等があるとしている。以下は、森下 (1999) が指摘している用例の一部である (括弧内は標準語)。

「ウッ」:「ウッチヌ (死ぬ)」

「オッ」:「オッキル (切る)」「オッタテル (立てる)」「オッツブス (潰す)」「オッパタク (叩く)」「オッパナス (放す)」「オッピロゲル (広げる)」

「カッ」:「カッチラカス (散らかす)」「カッツァバク (破く)」「かっつぁらう (さらう)」

「カッポジル (掘る)」

「クッ」:「クッチャベル (しゃべる)」

「シッ」:「シッチニクル (つねる)」「シッチョル (背負う)」「シツツァク (破く)」

「ツッ」:「ツッカケル (掛ける)」「ツッキル (横切る)」「ツツトス (刺す)」

「ツン」:「ツンザク (裂く)」「ツンモス (燃やす)」

「ハッ」:「ハットバス (叩く)」

「ハン」:「ハンナゲル (殴る)」

「ヒッ」:「ヒツツァゲル (ぶら下げる)」

「ヒン」:「ヒンヌク (抜く)」「ヒンマゲル (曲げる)」

「ブッ」：「ブッキル（切る）」「ブッタオス（倒す）」「ブッタタク（叩く）」

「フン」：「フンギル（諦める）」「フンズカマエル（捕まえる）」

「ブン」：「ブンナグル（殴る）」「ブンナゲル（投げる）」

「ボッ」：「ボッコム（打ち込む）」

- (4) 森下（2003）は、栃木県で敬語が発達しなかった理由として、歴史的に石高が多い城がなく城下町が発達しなかったこと、農業社会であったことの2つを挙げている。
- (5) 平山（2004）は、栃木方言の特徴的な文法項目として、推量の助動詞「べー／ペー」、回想の助動詞「タッタ／タツケ」等を挙げている。
- (6) 本稿での調査にあたり、被調査者、調査協力者等に調査終了後に説明を行った際、当為表現「～ヨウダ」を方言だと認識していた者はおらず、また標準語「～ヨウダ」との相違についても理解していない者が殆どであった。
- (7) 動詞の選定については特別な基準は設けなかったが、各状況下で不自然な会話文にならないように努めた。

参考文献

- (1) 大橋勝男（1963）「栃木方言における助動詞『さる』」『栃木県高等学校国語研究会』
- (2) グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- (3) 小池清次・小林賢次・細川英雄・山口佳也（2002）『日本語表現文型辞典』朝倉書店
- (4) 嶋均三（2003）『笑典 北とちぎ方言集』下野新聞社
- (5) 高丸圭一・松田勇一（2006）「那須地域の方言における句末イントネーションの予備調査－基本周波数パタンの特徴分析と分類－」『都市経済研究年報 第6号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (6) 高丸圭一・松田勇一（2007a）「那須地域の日本人学生と外国人留学生の自発音声に関する研究①－模擬対話における聞き返し型疑問文のアクセントとイントネーション－」『宇都宮共和大学論叢 第8号』
- (7) 高丸圭一・松田勇一（2007b）「那須地域の若年層に見られる方言語彙(2)－類語辞典に基づく方言語彙の意味分類－」『都市経済研究年報 第7号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (8) 平山輝男編（2004）『栃木県の言葉』明治書院
- (9) まいぶれ那須編（2006）『ごじゃっぺこくでねー栃木弁大全集』随想舎

- (10) 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- (11) 松田勇一・高丸圭一 (2006) 「那須地域の若年層に見られる方言語彙(1) 一方言データベースの作成と予備調査の結果から」『都市経済研究年報 第6号』宇都宮共和大学都市経済研究センター
- (12) 松田勇一・高丸圭一 (2008) 「栃木方言における当為表現『～ヨウダ』の用法」『宇都宮共和大学論叢 第9号』
- (13) 松田勇一・高丸圭一 (2009) 「栃木方言『～ヨウダ』の用法と使用実態—相手の年齢差と親疎による表現の使用差」『茨城大学留学生センター紀要 第9号』
- (14) 森下喜一 (1999) 『栃木の方言をたずねて』白帝社
- (15) 森下喜一 (2003) 『栃木弁ばんざい』随想舎
- (16) 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』創拓社 (pp.205-209)
- (17) 山口明穂・秋元守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院